訳注・翻訳

訓讀説文解字注（十七）

森　賀　一　惠

富山大学人文科学研究第 83 号抜刷
２０２５年９月

訳注・翻訳

訓讀説文解字注（十七）

森　賀　一　惠

「訓讀説文解字注（十六）」に續いて，段玉裁『説文解字注』を訓讀し注を附す。

凡例

『訓讀説文解字注』金册～匏册に倣う。説解原文に（一）（二）（三）等の漢數字の番號を附したのは，段注の入るべき箇所を示したもので，説解原文，段注に 1) 2) 3)等のアラビア數字の番號を附したのは，訓讀者注の被注箇所を示したものである。十三篇下**蚰**部～卵部は『繫傳』では缺けている卷二十五に含まれるが，今本の異同があれば記す。

十三篇下

（**蚰**部）

1a

𧊒，蟲之總名也 (一)，从二虫 (二)，凡**蚰**之屬皆从**蚰**，讀若昆，

蚰，蟲の總名也，二虫に从ふ，凡そ**蚰**の屬は皆な**蚰**に从ふ，讀みて昆(コン)の若くす，

（一）「蟲」下に曰く「足有るは之れを蟲と謂ひ，足無きは之れを豸と謂ふ」と。[1] 之れを析言する耳(のみ)。之れを渾言すれば則ち足無きも亦た蟲也。「虫」下に曰く「或いは行き或いは飛び，或いは毛或いは**蠃**，或いは介或いは鱗」皆な「虫を以て象と爲す」と。[2] 故に蟲は皆な「虫」に从ふ。而して「虫」は讀みて蟲と爲す可し。「蟲の總名」を「**蚰**」と**偁**す。凡そ經傳「昆蟲」と言ふは卽ち**蚰**蟲也。日部に曰く「昆は同也」。[3] 夏小正「昆小蟲」傳に曰く「昆なる者は衆也，猶ほ**蜫蜫**(コンコン)のごとき也，**蜫蜫**なる者は動也，小蟲は動く也」と。[4] 月令[5] に「昆蟲未だ蟄せず」，鄭曰く「昆は明也」と。許の意，小正の傳と同じ。

（二）二虫を**蚰**と爲し，三虫を蟲と爲す。**蚰**(コン)の言は昆(コン)也。蟲(チウ)の言は衆(シウ)也。古**蜫**の切，十三部。

1）十三篇下 4b 蟲部。『爾雅』釋蟲の文。p.181 參照。

2）十三篇上 40b 虫部「虫，一名**蝮**，博三寸，首大如擘指，象其臥形，物之**敃**細，或行或飛，或毛或**蠃**，或介或鱗，**㠯**虫爲象」（大徐本「**蠃**」を「蠃」に作り，「或飛」二字無し）。

3）七篇上 13b 日部「昆」説解。

4）夏小正・二月。『大戴禮記』今本は「猶」を「由」に作り，「也」下「者」上に「魂魂」二字無し。

5）月令でなく王制の經注。

𧇊，任絲蟲也 (一)，从蚰𣅀聲 (二)，

𧇊，絲を任ふ蟲也，蚰に从ふ，𣅀の聲，

（校）大徐本「蟲」字無し。

（一）「任」俗に譌りて「吐」に作る。今正す。[6]「任」は「𧇊」と疊韻を以て訓と爲す也。惟だ此の物能く此の事を任(にな)ふを言ふ。之れを美とする也。「絲」下に曰く「𧇊吐く所也」と。[7]

（二）昨含の切。古音は七部に在り。[8] 讀みて𣅀(シン)の如くす。

𧇊，𧇊匕飛𧇊 (一)，从蚰我聲 (二)，𧇊，或从虫，

𧇊，𧇊 飛𧇊に匕す，蚰に从ふ，我の聲，𧇊，或いは虫に从ふ，

（校）大徐本「匕」を「化」に，「𧇊」を「蟲」に作る。

（一）「匕」各本「化」に作る。今正す。「匕」なる者は「變也」。[9] 𧇊絲を吐けば則ち蛹を繭中に成す。蛹復た化し而して𧇊と爲る。按ずるに此の「𧇊」は虫部「蛾は羅」[10] の主に蟢を謂ふ者と截然として同じからず。而して郭氏『爾雅』「蛾は羅」を釋して「𧇊蛾」と爲す[11]は許の意に非ざる也。

（二）五何の切，十七部。

1b

𧇊，齧人跳蟲也 (一)，从蚰叉聲 (二)，叉，古爪字 (三)，𧇊，𧇊或从虫 (四)，

𧇊，人を齧み跳ぶ蟲也，蚰に从ふ，叉の聲，叉，古爪字，蚤，𧇊或いは虫に从ふ，

（校）大徐本「也」字無し。

（一）「齧は噬む也」[12]。「跳」は「躍ぶ也」[13]。𧇊は但だ人を齧む。𧇊は則ち之れに加へて善く躍ぶ。故に之れを著す。之れを悪むこと甚しき也。

（二）子皓の切。古音は三部に在り。[14]

（三）按ずるに此の四字妄人の沾(ま)す所。「古文」と言はず而して「古への某字」と言ふは、許に

6）『汲古閣説文訂』「十三下・𧇊，任絲也」條に「初印本如此，宋本、葉本、趙本、五音韻譜、集韻、類篇皆同，今𠛬改云，吐絲蟲，陋甚，𧇊从𣅀聲，古音讀如釜𣅀之𣅀，以任釋𧇊，以疊韻爲訓也，惟也字當作者，語意乃完，今本玉篇云，吐絲者，今本廣韻云，吐絲蟲，吐字必皆淺人所改，而斧季乃以改許書乎」。

7）十三篇上 40a 絲部「絲」説解。

8）𣅀聲は古十七部諧聲表では七部だが，昨含切（覃韻）は今韵古分十七部表では八部。

9）八篇上 39b 匕部「匕」説解。段注に「凡變匕當作匕，教化當作化，許氏之字指也，今變匕字盡作化，化行而匕廢矣」。

10）十三篇上 46b「蛾」説解。

11）釋蟲。郭注に「𧇊𧇊」。阮元本は「蛾」を「𧇊」に作る。釋文に「𧇊，本又作蛾，説文同，我河反」。

12）二篇下 22b 齒部「齧」説解。

13）二篇下 28a 足部に「跳，𧻚也，……，一曰躍也」。

14）古十七部諧聲表では叉聲は三部だが，今韵古分十七部表では子皓切（晧韻）は二部。

此の例無し。且つ「叉は手足の甲也」[15]，「爪は覔也」[16]，未だ嘗て「叉」を謂ひて「爪」の古文と爲さず。直だ俗に爪を謂ひて手足の甲と爲すに由りて，乃ち叉を謂ひて其の古字と爲し，徑ちに之れを此こに注す。刪去せざる可からず。

（四）經傳多く叚りて早字と爲す。[17]

𧊒，齧人蟲 (一)，从蚰丮聲 (二)，

蝨，人を齧む蟲，蚰に从ふ，丮の聲，

（一）古へ或いは「幾瑟」を叚りて「蟣蝨」と作す。[18]「蟣」なる者は「蝨の子也」。[19]

（二）所櫛の切，十二部。

𧊒，蝗也 (一)，从蚰宀聲 (二)，宀，古文終字 (三)，𧊒，螽或从虫，眾聲 (四)，

螽，蝗也，蚰に从ふ，宀の聲，宀，古文の終字，蟴，螽或いは虫に从ふ，眾の聲，

（校）大徐本，「宀」をいずれも「夂」に作る。

（一）「蝗」下に曰く「螽也」と。[20]是れ轉注爲り。按ずるに『爾雅』に「蝗螽」「草螽」「蜇螽」「蠰螽」「土螽」有り。[21]皆な所謂る螽醜也。「蜇螽」，『詩』「斯螽」に作り[22]，亦た「螽斯」[23]と云ふ。毛、許皆な訓ずるに「蝍蟝」を以てす。皆な螽の類にして螽に非ざる也。惟だ『春秋』書く所の者，螽爲り。[24]

（二）職戎の切，九部。

（三）糸部に見ゆ。[25]

15）三篇下 17a 又部「叉」説解。「叉」字段注は「叉爪古今字，古作叉，今用爪，禮經假借作蚤」とする。古十七部諧聲表「叉聲」にも「古文爪」との注がある。

16）三篇下 13b 爪部「爪，覔也，覆手曰爪」。段注に「仰手曰掌，覆手曰爪，今人以此爲叉甲字，非是，叉甲字見又部，蚰部蝨字下云，叉古爪字，非許語也」。

17）例えば，『禮記』曲禮上、少儀の「蚤莫」，内則「孺子蚤寢晏起」，中庸「蚤有譽於天下」（いずれも釋文「音早」）など。

18）蟣蝨は韓の公子，襄王の子。『史記』韓世家は「蟣蝨」に作るが，『戰國策』韓策は「幾瑟」に作る。

19）十三篇上 44a 虫部「蟣」説解。

20）十三篇上 50b 虫部「蝗」説解。

21）釋蟲に「蝗螽，蠰，草螽，負蠜，蜇螽，蝍蟝，蠰螽，蟴蚚，土螽，蠰谿」。

22）豳風・七月「五月斯螽動股」傳「斯螽，蝍蟝也」。

23）周南・螽斯。「螽斯羽詵詵兮」傳「螽斯，蝍蟝也」。

24）「螽」は「蝗」（イナゴ），「螽斯」「斯螽」は「蝍蟝」（キリギリス）ということか。『春秋』の「螽」は『左傳』『穀梁傳』の桓公五年、僖公十五年、文公三年、八年、宣公六年、十三年、十五年、襄公七年、哀公十二年、十三年の經に見え，蝗災をいう。

25）十三篇上 9b「終，絲絲也，宀，古文終」。

（四）『公羊』經，此くの如く作る。[26]

𧊒，𧊒蟲也 (一)，从蚰𡱝省聲 (二)，

𧊒，𧊒蟲也，蚰に从ふ，𡱝の省の聲，

（校）大徐本，「蟲」上に「𧊒」字無し。

（一）「蟲」上，「𧊒」字を補ふ。三字一句。蟲名也。

（二）知衍の切，十四部。

𧊒，小蟬蜩也 (一)，从蚰截聲 (二)，

𧊒，小蟬蜩也，蚰に从ふ，截の聲，

（一）蟬の小なる者を謂ふ也。釋蟲に曰く「𧊒は茅蜩」，郭云く「江東呼びて茅𧊒と爲す，蟬に似て而して小なり，青色」と。[27]『方言』曰く「蟬，其の小なる者は之れを麥𧊒と謂ふ」，郭云く「蟬の如くして而して小なり，青色，今關西麥𧊒と呼ぶ」と。[28] 按ずるに「茅」「麥」は雙聲，「𧊒」「𧊒」は同字。郭云く，「𧊒は音癰癥の癥」[29] と。

（二）子列の切，亦た音札，十五部。按ずるに其の字「蚰」に从ふ。故に虫部「蟬」「蜩」等と處を異にす。[30]

2a

𧊒，𧊒蟊 (一)，作网𧊒蟊也 (二)，从蚰𦉢聲 (三)，𦉢，古文絕字 (四)，

𧊒，𧊒蟊，网を作る𧊒蟊也，蚰に从ふ，𦉢の聲，𦉢，古文の絕字，

（校）大徐本，「网𧊒」を「罔蛛」に作り，「古」下に「文」字無し。

（一）逗。

26）『左傳』『穀梁傳』の「螽」を『公羊傳』はすべて「蝝」に作る。注 24 參照。

27）經上文に「𧊒，蜻蜻」。釋文に「𧊒，側黠反」「𧊒，子列反，又徂節反」。阮元本注は「茅𧊒」を「茅截」に作る。校勘記に「𧊒，茅蜩，唐石經、單疏本、雪牕本同，釋文作𧊒，舊挍云，本今作𧊒，五經文字亦作𧊒，按說文，𧊒，小蟬蜩也，从蚰截聲，蓋今本所從出，據注云江東呼為茅截，蓋經作𧊒，注作截也」，「似蟬而小，青赤，單疏本、雪牕本同，注疏本赤作色，此涉上𧊒茅蜩注似蟬而小青色致誤，按詩七月正義、禮記月令正義皆引作青赤，初學記卷三十引青而赤」。

28）卷 11。

29）『方言』注「今關西呼麥𧊒」下文。

30）「蟬」「蜩」いずれも十三篇上 50b 虫部。

（二）黽部に曰く「**䵷****𧊒**は**𧊒**蟊也」と。[31] 一物三名。釋蟲に曰く「次**蠹**は**䵷****𧊒**，**䵷****𧊒**は**𧊒**蝥」[32] と。按ずるに「次**蠹**」は卽ち許の「**䵷**蟊」，「**𧊒**蝥」は卽ち許の「**𧊒**蟊」也。「次」，古音，漆（シツ）に同じ。[33] 故に「**䵷**」と音近し。「**蠹**」は縛牟の切，故に「**蟊**（バウ）」と音近し。『爾雅』字「**蠹**」に譌る。[34] 而して釋文云く「或いは蝥に作る，郭音秋」と。蓋し誤ること甚し矣。或いは曰く，**蠹**，出の聲に从ふと。卽ち郭注の「**蝃**」字[35]，『集韵』の「**蚰**」字[36]。『爾雅』の「次**蠹**」は卽ち許の「**䵷**」字。是の説，之れに近し。然るに陸氏音義未だ之れを言ふ能はざる也。「网を作る**𧊒**蟊」は卽ち今の能く罔を作るの蛛蝥を謂ふ也。

（三）側八の切，十五部。

（四）「文」各本奪ふ。今補ふ。糸部に見ゆ。[37]

𧊒，**䵷**蟊也，从**蚰**矛聲 (一)，

蟊（バウ），**䵷**蟊也，**蚰**に从ふ，矛の聲，

（一）此の字，蟲部の「艸の根を食ふ者」[38] と絕（はなは）だ異れり。莫交の切。古音謀（ボウ），三部に在り。[39]

𧊒，**𧊒**蟲也 (一)，从**蚰****𧊒**聲 (二)，

𧊒，**𧊒**蟲也，**蚰**に从ふ，**𧊒**の聲，

（校）大徐本，「蟲」上に「**𧊒**」無し。

（一）「蟲」上に「**𧊒**」字を補ふ。三字句。蟲名也。『廣韵』「螻蛄」と云ふ。[40]

（二）奴丁の切，十二部。

𧊒，**𧊒**也 (一)，从**蚰****𧊒**聲 (二)，

𧊒，**𧊒**也，**蚰**に从ふ，**𧊒**の聲，

31）十三篇下 11b「**䵷**」説解。但し，大徐本、祁刻本は「**䵷****𧊒**，**蟊**也」に作り，「**𧊒**」字を重ねない。

32）阮元本は「**蠹**」を「**蚕**」に作る。校勘記に「次**蚕**，按經文**蚕**字於六書皆不合，出非諧聲也，以諧聲求之，當是作**蠹**，从**蚰****桑**聲，與説文**蚍****蠹**同字，次**蠹**在説文則作**䵷**蟊，古音相同也，次，古音讀如**桼**」。郭注に「今江東呼**蝃**蝥，音掇」，釋文に「**蚕**，本或作**蝥**，郭音秋」。

33）八篇下 25b 欠部「次」段注に「古音在十二部，讀如漆」。

34）阮元本は「**蚕**」に作る。注 32 參照。

35）注 32 參照。

36）入十七薛・拙（朱劣）小韻「**蝃**、**蚰**、**䵷**，蟲名，蜘蛛也，或从出，或从**𧊒**」。

37）十三篇上 5a「絶，斷絲也，……，**𧊒**，古文絕，象不連體絕二絲」。

38）十三篇下 4b「**𧊒**，蟲食艸**根**者」。p.181 參照。

39）古十七部諧聲表で矛聲は三部，今韵古分十七部表で謀（尤韻）は三部だが，莫交切（肴韻）は二部。

40）下平十五青・寧（奴丁切）小韻「**𧊒**，螻蛄」。

（一）「𧊒」字，虫部に見ゆ。[41]

（二）財牢の切，古音は三部に在り。[42]

2b

𧊒，螻蛄也 (一)，从蚰𦍒聲 (二)，

𧊒，螻蛄也，蚰に从ふ，𦍒の聲，

（一）「螻蛄」は虫部に見ゆ。[43] 一名𧊒。

（二）胡葛の切，十五部。

𧊒，𧊒蛸也 (一)，从蚰卑聲 (二)，𧊒，𧊒或从虫，

𧊒，𧊒蛸也，蚰に从ふ，卑の聲，𧊒，𧊒或いは虫に从ふ，

（一）三字句。「蛸」字は虫部に見ゆ。[44]

（二）匹標の切。按ずるに『爾雅』釋文に「音俾，又た婢貽の反」と。[45] 十六部に在り[46]「蛸」と雙聲，疊韵に非ざる也。[47]

𧊒，飛蟲螫人者 (一)，从蚰逢聲 (二)，𧊒，古文，省，

𧊒，飛ぶ蟲の人を螫す者，蚰に从ふ，逢の聲，𧊒，古文，省（はぶ）く，

（一）『左傳』「𧊒𧊒毒有り」。[48] 按ずるに釋蟲に「土𧊒」、「木𧊒」と言ひ，「𧊒」を單言する者無し。[49] 許書は則ち「蠮贏」下に云く「細腰の土𧊒也」と。[50] 卽ち『爾雅』の「土𧊒」。然らば則ち此れ「𧊒」を單言するは，卽ち『爾雅』の「木𧊒」也。『本艸經』に「露蜂房、亦た木上の大黃𧊒の

41）十三篇上 45a「𧊒，𧊒𧊒也」

42）古十七部諧聲表では𦍒聲は三部だが，今韵古分十七部表では財牢切（豪韻）は二部。

43）十三篇上 46b に「螻，螻蛄也，一曰𧊒，天螻」「蛄，螻蛄也」。

44）十三篇上 47b に「蛸，𧊒蛸，堂蜋子」，段注に「相邀切，二部」。

45）阮元本は「𧊒」を「蜱」に作る。釋蟲「不過，蟷蠰，其子蜱蛸」釋文に「蜱，音裨，又婢貽反」，通志堂本、北京図書館藏宋刻宋元遞修本いずれも「俾」を「裨」に作る。

46）古十七部諧聲表で卑聲は十六部，今韵古分十七部表で「俾」（紙韻）「裨」（支韻）は十六部だが，婢貽反（之韻）は一部。

47）二部と十六部で疊韵ではないが，段玉裁が雙聲とする理由は不明。

48）僖公二十二年傳。阮元本は「𧊒」を「蠆」に作る。校勘記に「釋文，𧊒，本又作𧊒，俗作蜂，蠆，字林作𧊒」。十三篇上 45a 虫部「𧊒，毒蟲也，象形」段注に「其字上本不从萬，以苗象其身首之形，俗作萬，非，且與牡蠣字混」。

49）「土𧊒」注に「今江東呼大𧊒在地中作房者為土𧊒，啖其子，即馬𧊒，今荊巴間呼為蟺，音憚」，「木𧊒」注に「似土𧊒而小，在樹上作房，江東亦呼為木𧊒，又食其子」。

50）十三篇上 48b 虫部「蠮，蠮贏，蒲盧，細要，土𧊒也，天地之性細要純雄無子，詩曰，螟蠕有子，蠮贏負之，……」。

窠を謂ふ也。其の房大なる者は罋の如く，小なる者は桶の如し」と。[51]「露蠭」と云ふは，正しく土蠭の地中に在るに對して之れを言ふ。許，土蠭を謂ひて「細要純雄」と爲す。其れ「飛ぶ蟲の人を螫す者」は則ち大黄蠭を謂ふ。竝びに「細要純雄無子の者」に非ず。內則[52]、檀弓[53]は之れを「范」と謂ひ，俗に蝨に作る。其の子食す可し。故に內則 庶羞に「雀[54]、鶉、蜩、范」と。

（二）敷容の切，九部。

蜜，蠭甘飴也 (一)，一曰螟子 (二)，从虫鼏聲 (三)，蜜，蠭或从宓 (四)，

蠭，蠭の甘飴也，一に曰く，螟子，虫に从ふ，鼏の聲，蜜，蠭或いは宓に从ふ，

（一）「飴」なる者は「米糵の煎也」[55]。蠭 食を作るに甘きこと之くの如し。凡そ蠭に皆な蠭有り。『方言』「蠭，大にして而して蜜ある者は之れを壺蠭と謂ふ」，郭云く「今黑蠭 竹木を穿ちて孔を作り，亦た蜜有る者有り」と。[56] 是れ則ち蠭飴を蠭と名づけ，主には今の蜜蠭を謂はざる也。叚借して蠭沒の字と爲す。釋詁に曰く「蠭沒は勉也」と。亦た「蠭沒」に作る。[57]『韓詩』は「蜜勿」に作り，[58]『毛詩』は「僶勉」に作る。[59]

（二）「螟」は虫部に見ゆ。穀心を食する者。[60] 其の子は蠭と曰ふ。

51）『本艸』の概略は『訓讀説文解字注 金册』p.378 の艸部注 (105) 參照。『重修政和證類本草』卷 21 蟲部中品・露蜂房に「圖經曰, 露蜂房……, 此木上大黄蜂窠也, 大者如甕, 小者如桶, ……」。四部叢刊本は「罋」を「甕」に作る。

52）「牛脩、鹿脯、……、爵、鶉、蜩、范」注「蜩，蟬也，范，蜂也，……，自牛脩至此三十一物，皆人君庶食所加，庶羞也」。釋文「蜩范，……，下音犯，范，蠭也」「蠭，本又作蜂，芳凶反」。

53）檀弓下「范則冠而蟬有緌」注「范，蜂也」釋文「蜂也，孚逢反」。

54）阮元本は「雀」を「爵」に作る。注 52 參照。

55）五篇下 7b 倉部「飴」説解。但し，段注本は「煎」下「也」上に「者」を補う。

56）卷 11。戴本（『疏證』）、漢魏叢書本は「謂」上に「者」字無し。周祖謨『校箋』に「盧氏據曹毅之本蜜下增者字」。また，各本，郭注「有」字を重ねない。

57）釋詁上。阮元本は「蠭沒」に作る。釋文に「蠭，彌畢反，又亡忍反，本或作蠭，古密字」。

58）十篇下 33b 心部「愐, 勉也」段注に「按毛詩黽勉亦作僶俛, 韓詩作密勿, 爾雅作蠭沒, 蠭本或作鼏, 鼏卽蜜, 然則韓詩正作蜜勿，轉寫誤作密耳」。『文選』卷 38 傅亮・爲宋公求加贈劉前將軍表「密勿軍國，心力俱盡」李善注に「韓詩曰，密勿同心，不宜有怒，密勿，僶勉也」。

59）阮元本は「黽勉」に作る。邶風・谷風「黽勉同心，不宜有怒」釋文に「黽勉，本亦作僶，莫尹反，黽勉猶勉勉也」，また小雅・十月之交「黽勉從事，不敢告勞」釋文に「黽勉，民允反，本又作僶，同」。

60）十三篇上 43b「螟, 蟲食穀心者, 吏冥冥犯法即生螟」。但し, 大徐本は「心」を「葉」に作る。段注に「心, 各本譌葉，今依開元占經正」。

（三）「鼏」は鼎蓋也，冥の入聲。「横ざまに鼎耳を關する」の「鼏」，音扃（ケイ）に非ざる也。[61] 彌必の切。按ずるに其の音，平は則ち十一部に在り，冥の如し。入は則ち十二部に在り，密の如し。[62]
（四）宓の聲。今，此の體を通用す。

3a

𧊒，𧊒蜽也 (一)，从蚰巨聲 (二)，
𧊒，𧊒蜽也，蚰に从ふ，巨聲，
（一）三字句。「蜽」字は虫部に見ゆ。[63]
（二）强魚の切，五部。

𧊒，齧人飛蟲 (一)，从蚰民聲 (二)，𧊒，𧊒或从昏 (三)，𠃬昏時出也 (四)，𧊒，俗𧊒，从虫从文 (五)，
𧊒，人を齧み飛ぶ蟲，蚰に从ふ，民の聲，𧊒，𧊒或いは昏に从ふ，昏時に出づるを𠃬て也，蚊，俗𧊒，虫に从ひ，文に从ふ，
（一）人を齧み而して又た善く飛ぶ者。
（二）無分の切，十三部。此の字民聲なれば，則ち當に十二部なるべし。疑らくは古本祇だ「𧊒」有り，而して「𧊒」は乃ち後人の製る所也。[64]
（三）「昏」は「氐の省に从ひ，氐なる者は下也」，俗に「一曰民聲」を沾（ま）す。[65] 而して「𧊒」篆上亦た「𧊒」篆を沾す矣。
（四）會意の旨を説く。而して形聲 其の中に在り。

61）『説文解字』（大徐本七上、小徐本十三）に「鼏，以木横貫鼎耳舉之，从鼎冂聲」。段注本七篇上鼎部 36a「鼏，𠃬木横貫鼎耳舉之，从鼎冂聲」注「古熒切，十一部，按大小徐篆皆作鼏，解作冂聲，莫狄切，以鼎蓋字之音，加諸横田鼎耳之義，誤矣，廣韵、集韵、禮部韵略、玉篇、類篇皆佚此字，然廣韵、玉篇皆云亡狄切，鼎蓋也，則鼏字尚未亡，集韵、類篇引横貫鼎耳云云於錫韵冥狄切，而鼏字亡矣，惟匡謬正俗及毛晃禮部韵略增字獨不誤」，36b「鼏，鼎覆也，从鼎冖，冖亦聲」注「此九字各本無，以鼏篆鼏解，牛頭馬脯而合之，今補正，……，从鼎冖者，冖，覆也，冖亦聲者，據冥字之解知之，古者覆巾謂之幎，鼎蓋謂之鼏，而禮經時亦通用，蚰部𧊒从鼏聲，亦作蜜，虎部𧊒讀若鼏，是知鼏古音同冥，亦同密，在十一十二之間，今音則莫狄切」。いずれも説解の「關」を「貫」に作る。段玉裁は『説文解字』各本が「鼏」篆に「鼏」の説解を合わせて一つにしているとし，「鼏」篆を「鼏」篆に改め，「鼏」篆に「鼎覆也」という説解を附すので，ここでも「鼏」ではなく「鼏」であることを強調している。
62）今韵古分十七部表では彌必切（質韻）は十二部，十一部に入聲は無い。古十七部諧聲表では冥聲、鼏聲は十一部，宓聲は十二部。
63）十三篇上 52a「蜽，𧊒蜽，一曰浮游，朝生莫死者」。
64）今韵古分十七部表で無分切（文韻）は十三部，古十七部諧聲表では民聲は十二部だが，昏聲は十三部。
65）七篇上 7a 日部「昏，日冥也，从日、氐省，氐者下也，一曰民聲」，「一曰民聲」段注に「此四字蓋淺人所增，非許本書，宜刪，凡全書内昏聲之字皆不从民，有从民者譌也」。

（五）虫部に曰く「秦晉は之れを蝤と謂ひ，楚は之れを蚊と謂ふ」と。[66]

𧊒，齧人飛蟲 (一)，从蚰亡聲 (二)，

𧊒，人を齧み飛ぶ蟲，蚰に从ふ，亡の聲，

（一）「人」當に「牛」に作るべし。楚語に「譬如牛馬，處暑之既至，𧊒𧊒之既多，而不能掉其尾」，韋云く「大は𧊒と曰ひ，小は𧊒と曰ふ」と。[67]『説苑』に曰く「𧊒蝝 柱梁を仆し，蚊𧊒 牛羊を走らす」と。[68]『史記』に「牛を搏つの𧊒は，以て蟣蝨を破る可からず」と。[69]『淮南書』に曰く「蟲𧊒𧊒は駒犢を食らはず」。[70] 今人尚ほ牛を齧む者を謂ひて牛𧊒と爲す。『本艸經』に「木𧊒」、「蜚𧊒」有り。[71]

（二）武庚の切，古音は十部に在り。[72] 讀みて茫（バウ）の如くす。

蠹，木中蟲 (一)，从蚰橐聲 (二)，蠹，蠹或从木，象蟲在木中形，譚長説 (三)，

蠹，木中の蟲，蚰に从ふ，橐の聲，蠹，蠹或いは木に从ふ，蟲 木中に在る形に象る，譚長の説，

（一）木中に在りて木を食する者也。今俗に之れを蛀と謂ふ。音注（シュ）。『左傳』に曰く「公聚は朽蠹す」と。[73]

（二）當故の切，五部。

（三）上は形聲，此れは會意。

3b

蠡，蟲齧木中也 (一)，从蚰彖聲 (二)，蠡，古文 (三)，

蠡，蟲 木中を齧む也，蚰に从ふ，彖の聲，蠡，古文，

（校）大徐本，「彖」を「彖」に作る。

（一）此れ蟲名に非ず。乃ち蠹の木を食するを謂ひて蠡と曰ふ也。朱子『孟子』に注して「蠡なる者は木を齧む蟲」と曰ふ[74] は，則ち誤れり矣。蠡（レイ）の言は剺（リ）也，刀の物を剺（き）くが如し。蠡，

66）十三篇上 52a「蝤」説解。但し，段注本は「蚊」を「蟲」に改め，注に「蟲作蚊，俗，今正，蟲在蚰部，故不類列於此也」という。

67）楚語上。

68）談叢。

69）項羽本紀。

70）天文訓。『淮南鴻烈解』は「𧊒」を「𧊒」に作る。

71）「木𧊒」,「蜚𧊒」いずれも『重修政和證類本草』卷 21 蟲部中品に見える。白字なので,『神農本草』由來。

72）古十七部諧聲表で亡聲は十部だが，今韵古分十七部表で庚韻は十一部。

73）昭公三年傳。

74）盡心下「以追蠡」集注。注 79 參照。

叚借の用極めて多し。或いは借りて蠃蚌の字と爲し，[75]或いは借りて瓢𧒒の字と爲す。[76]『楚辭』に「芷圃の蠡蠡たるを覽る」と。[77] 又た借りて禾黍離離の字[78] と爲す。『孟子』に曰く「追の蠡せるを以てなり」，趙注して曰く「追は鐘鈕也，鈕の擘齧する處深し矣，蠡蠡は絕えんと欲するの皃」と。[79] 此れ又た「蠡」を以て「離」に同じうし,「𠟭」に同じうす。『方言』に曰く「𠟭は解也」[80]，又た曰く「蠡は分也」[81] と。皆な其の義也。叚借の恉を知らざれば、乃ち「鐘鈕，蟲齧むが如く而して絕えんと欲す」と云ふ。[82] 是れ許書の辭を株守し而して未だ許書の意に通ずる能はず矣。

（二）「彖」は彑部に見ゆ。「讀みて弛の若くす」。[83]「通貫の切」の「彖」[84] に非ざる也。此れ久しく誤る。今，篆文併びに説解を正す。盧啟の切，十六部。

（三）按ずるに此の古文 篆と別ならず。疑ふらくは古文は豕に从ふ。

蠫，多足蟲也 (一)，从蚰求聲 (二)，蠫，蟲或从虫，

蟲，多足の蟲也，蚰に从ふ，求の聲，蛩，蟲或いは虫に从ふ，

（一）『周禮』赤友氏「凡そ隙屋は其の貍蟲を除く」，鄭曰く「貍蟲は蠦，肌求の屬」と。[85] 按ずるに「蠦」は『本艸經』に見ゆ。[86] 一名地鼈。今俗に所謂る地鼈蟲也。鼠婦に似る。「肌求」本或いは「蚫」に作る。多足の蟲。今俗に所謂る蓑衣蟲也。『通俗文』に曰く「務求は之れを蚑

75）十三篇上 56b 虫部「蝸，蝸，蠃也」段注に「蠃古多叚蠡爲之」。『周易』説卦傳「離為火，……，為蟹，為蠃，……」釋文に「蠃，力禾反，京作螺，姚作蠡」。

76）七篇下 5a 瓠部「瓢，蠡也」段注に「蠡者、蠆也，豆部曰，蠆者蠡也，以一瓠𠟭爲二曰瓢，亦曰蠡，亦曰蠆，蠡一作蠫，見九歎、方言，……，其作蠡者見周禮鬯人注、漢書東方朔傳，詳豆部」。『周禮』春官･鬯人「祭門，用瓢齎」注に「瓢謂瓠蠡也」，『漢書』東方朔傳「以蠡測海」注に「張晏曰，蠡，瓠瓢也」。

77）劉向 九歎・惜賢。王逸章句に「蠡蠡猶歴歴行列貌也」。

78）『毛詩』王風・黍離に「彼黍離離」。

79）盡心下。阮元本注は「擘」を「磨」に作り，「蠡」字を重ねない。校勘記に「鈕磨齧處深矣，閩、監、毛三本同，宋本、孔本、韓本、考文古本磨作擘」また「蠡欲絕之貌也，閩、監、毛三本同，廖本、孔本、韓本、考文古本疊蠡字，足利本不疊，無也字」。『孟子集注』に「豐氏曰，追，鐘紐也，……，蠡者，齧木蟲也，言禹時鐘在者，鐘紐如蟲齧而欲絕，蓋用之者多，……」。

80）卷 13。注「音儷」。

81）卷 6。注「謂分割也，音麗」。

82）『孟子集注』。注 79 參照。

83）九篇下 39b「彖，豕也，从彑，从豕，讀若弛」段注に「式視切，按古音在十六十七部閒，廣韵尺氏切，是也，蠡从蚰彖聲，慡从心彖聲，古音皆在十六部，今韵蠡入齊，慡入佳皆不誤，而字形从彖則誤」。孫刻大徐本は篆を「彖」に作る。

84）九篇下 39b 彑部「彖，豕𢍰也，从彑，从豕省」，段注に「通貫切。十四部」。孫刻大徐本は篆を「彖」に作る。

85）秋官。

86）『重修政和證類本草』卷 21 蟲部中品。

蛷と謂ふ」と。[87]『廣雅』に曰く「蛷蝬は蟒蛷也」と。[88] 玄應曰く「關西 蚤溲を呼びて蚊蛷と爲す」と。[89]「蚊蛷」は卽ち鄭の所謂る「肌蛷」也。陶隱居[90]、陳藏器[91]「蠷蝬」に作る。音劬蘇。

（二）巨鳩の切，三部。

4a

𧑚，蠶蠹也（一），从蚰秦聲（二），𧑚，蠹或从虫，从孚（三），

蠢，蠶蠹也，蚰に从ふ，秦の聲，蜉，蠹或いは虫に从ひ，孚に从ふ，

（一）蟲部に「蠶蠹，大蟢也」と。[92] 此れ「大蟢」と言はざる者は，義，上一字に見ゆ。全書の例是くの如き也。「蚍蜉は大蟢」は釋蟲の文，郭云く「俗に呼びて馬蚍蜉と爲す」と。按ずるに馬の言は大也。

（二）縛牟の切，三部。

（三）孚の聲。古音孚，讀みて浮の如くす。

𧑚，蟲食也（一），从蚰雋聲（二），

蠶，蟲食ふ也，蚰に从ふ，雋の聲，

（一）蠶の言は吮也。「吮は欶ふ也」。[93]「鳥は嗉と曰ひ，寓鼠は嗛と曰ひ」[94]，昆蟲は蠶と曰ふ。

（二）子兖の切，十三部。

𧑚，蟲動也（一），从蚰晉聲（二），𧑚，古文蠢（三），周書曰，我有戣于西（四），

蠢，蟲動く也，蚰に从ふ，晉の聲，戣，古文の蠢，周書に曰く，我 西に戣有りと，

（一）此れ「蝡」と義同じ。轉注の法を以て之れを言へば，「蝡也」と云ふ可し。引申して凡そ

87）『一切經音義』卷 9 大智度論第十八卷「蚊蜂」注引く『通俗文』は「務」を「矜」に作る。（注 89 參照）『小学鉤沈』卷 7 通俗文下「矜求謂之蚊蛷」王念孫案語に「矜當爲務，廣雅……，蟒與務通」。

88）釋蟲。

89）『一切經音義』卷 9 大智度論第十八卷「蚊蜂, 巨儀反, 通俗文, 矜求謂之蚊蛷, 關西呼蚤溲爲蚊蛷, 聲類云, 多足蟲也」，また卷 20 孛經抄「蚊蜂，巨儀反，聲類云，多足蟲也，關西謂蚤溲爲蚊蛷，蚤音求俱反，下所誅反」。

90）『重修政和證類本草』卷 29 菜部下品「雞腸草」下に「陶隱居云，……，療蠷蝬溺」。

91）『重修政和證類本草』卷 21 蟲魚中品・二十一種陳藏器餘。

92）十三篇下 5a。p.182 參照。大徐本は「蠶蠹」を「蚍蜉」に作る。

93）二篇上 14b 口部「吮」説解。

94）『爾雅』釋獸。

動の偁と爲す。『詩』「蠢爾たる荊蠻」，毛傳に曰く「蠢は動也」と。[95] 鄉飲酒義に曰く「東方者春，春の言爲るは蠢也，萬物を產む者也」，注に云く「蠢は動生の皃」と。亦た「春」を叚りて之れと爲す。考工記「皮矣を張りて而して鵠を棲ましめ，則ち春に功を以てす」，注に云く「春は讀みて蠢と爲す，作也，出也」[96] と。「蠢」，心部「惷」の「亂」と訓ずる[97] と義異れり。

（二）形聲中に會意有り。尺尹の切，十三部。

（三）𢦏に从ふ，𢦏の言は才(サイ)也，始也。

（四）大誥に曰く「西土に大艱有り，西土の人亦た靜かならず，茲こに越いて蠢く」と。「𢦏」は壁中古文の眞本爲り。其の辭同じからざる者は，蓋し許 其の辭を𢦏梧すること此くの如き也。

○𧑐，飛蟺，从蚰尉聲 (一)，

○𧑐，飛蟺，蚰に从ふ，尉聲，

（校）各本「𧑐」篆無し。

（一）『爾雅』「𧑐は飛蟺」釋文曰く「說文，字林，蚰に从ふ」と。[98] 今據りて補ふ。於貴の切，十五部。

文二十五（一）　重十三

（一）今「𧑐」を增せば，則ち二十六。

95）小雅・采芑。阮元本は「荊蠻」を「蠻荊」に作る。校勘記に「唐石經、小字本、相臺本同，案段玉裁云，漢書韋賢傳引荊蠻來威，案毛云，荊州之蠻也，然則毛詩固作荊蠻，傳寫倒之也，晉語、後漢書李膺傳、文選王仲宣誄皆可證，見詩經小學，今考正義云，宣王承厲王之亂，荊蠻內侵，是正義本作荊蠻，下文皆作蠻荊，後人依經注本倒之而有未盡也」。『詩經小學』卷 2 蠢爾蠻荆「韋元成傳引荆蠻來威，按毛云，荆州之蠻也，然則毛詩固作荆蠻，傳寫誤倒之也，晉語叔向曰，楚爲荆蠻，韋注荆州之蠻，正用毛傳爲說，又齊語萊莒徐夷吳越，韋注徐夷徐州之夷也，可證荆蠻文法，又按吳都賦跨躡蠻荆，李善注引詩蠢爾荆蠻，然則唐初詩不誤，左思倒字以與幷精坰爲韻，後漢李膺傳應奉疏曰，緄前討荆蠻，均吉甫之功（毛刻不誤，汪文盛本譌倒作蠻荆），注引蠻荆來威者，俗人所改易也，文選王仲宣誄，遠竄荆蠻，注引毛詩蠢爾荆蠻，亦誤倒，（禮堂按漢書陳湯傳引詩蠻荆來威，師古曰令荆土之蠻亦畏威而來，是本作荆蠻）」。

96）梓人。阮元本注は「蠢」下に「蠢」を重ねる。

97）十篇下 42b「惷，亂也」。

98）釋蟲。阮元本は「𧑐」を「𧑐」に作る。釋文は，通志堂本、北京図書館本いずれも「从蚰」を「從蚰」に作る。法偉堂校記に「蚰乃蚰之譌」。阮元校勘記に「唐石經、單疏本、雪牕本同，釋文，𧑐，於貴反，說文、字林從蚰，五經文字，𧑐，於貴反，爾雅又作𧑐，按釋文蚰為蚰之訛，謂說文、字林皆從蚰，作𧑐，爾雅則從虫，作𧑐也，唐石經今本依字書改𧑐，非，今說文無𧑐、𧑐字，玉篇，𧑐，飛蟺也」。

（蟲部）

4b

𧊒，有足謂之蟲，無足謂之豸 (一)，从三虫 (二)，凡蟲之屬皆从蟲，

蟲，足有るは之れを蟲と謂ひ，足無きは之れを豸と謂ふ，三虫に从ふ，凡そ蟲の屬は皆な蟲に从ふ，

（一）渾言を舉げて以て析言を包ぬる者有り，析言を舉げて以て渾言を包ぬる者有り。此の「蟲」「豸」は析言して以て渾言を包ぬる也。蟲なる者は蜎動の總名。前文既に之れを詳かにす矣。故に祇だ『爾雅』釋蟲の文[99] を引く。「豸」なる者は，「獸の脊を長くし行くこと豸豸然として伺殺する所有らんと欲する形」也。[100] 本と有足の蟲を謂ふ。凡そ蟲の足無き者は其の行くこと，但だ脊を長くして豸豸然たるを見るに因りて，故に「豸」の名を叚借するを得。今人の俗語に「蟲豸」と云ふ。『詩』「溫隆蟲蟲たり」，毛傳に曰く「蟲蟲として熱き也」と。[101] 按ずるに「蟲蟲」は蓋し「融融」の叚借。[102]『韓詩』「烔」に作る。許取らざる所。

（二）「人三を眾と爲し」，[103] 虫三を蟲と爲す。蟲は猶ほ眾のごとき也。直弓の切，九部。

𧊒，蟲食艸梣者 (一)，从蟲，弔，象形 (二)，吏抵冒取民財則生 (三)，螫，𧊒或从敄 (四)，𧊒，古文𧊒，从虫，从牟 (五)，

𧊒，蟲の艸の梣を食ふ者，蟲に从ふ，弔，象形，吏抵冒して民財を取れば則ち生ず，螫，𧊒或いは敄に从ふ，蛑，古文の𧊒，虫に从ひ，牟に从ふ，

（一）「艸」，當に「苗」に作るべし。小雅「其の螟螣を去り，其の蟊賊に及ぶ」[104]，釋蟲に「苗の梣を食ふは，蟊」[105]，毛傳に「梣を食ふを蟊と曰ふ」。「螟」「螣」は已に虫部に見ゆ。[106] 螣は是れ介の屬，螟𧊒は是れ蠃の屬。

99）疏に「此對文爾，散文則無足亦曰蟲」。

100）九篇下 40b 豸部「豸」説解。段注本は「伺」を「司」に作り，注に「司今之伺字，許書無伺」と。段注はまた『爾雅』釋蟲「有足謂之蟲，無足謂之豸」を引き「按凡無足之蟲體多長，如蛇蚓之類，正長脊義之引伸也」という。

101）大雅・雲漢。釋文に「蟲蟲，直忠反，徐徒冬反，……，郭又徒冬反，韓詩作烔，音徒東反」。阮元本は「溫」を「蘊」に作る。校勘記に「唐石經、小字本、相臺本同，案正義云，溫字定本作蘊，以小宛正義考之，當云，蘊字定本，作溫，正義屢云蘊蘊，是其本作蘊之證也，釋文云，蘊，紆粉反，本又作熅，紆文反，依紆文反，是讀同烟烟熅熅之熅，與作溫又不同」。

102）三篇下 10b 鬲部「炊气上出也，从鬲蟲省聲」段注に「以戎切，九部」。

103）『國語』周語上。

104）大田。『説文』「螣」篆説解は『詩』を引いて「去其螟螣」に作る。下注參照。

105）阮元本は「苗」字無し。

106）十三篇上 43b「螟，蟲食穀心者，吏冥冥犯法卽生螟」（大徐本は「心」を「葉」に作る）「螣，蟲食苗葉者，吏气貸則生螣，詩曰，去其螟螣」（大徐本は「貸」を「貸」に作る）。

（二）上體, 此の蟲 苗幹に繚繞するの形に象るを謂ふ。蚰部「蠶蟊」字の「蚰に从ひ矛の聲」[107] と同じからざる也。今人は則ち盡く蟊を叚りて之れと爲す矣。莫浮の切，三部。

（三）「抵」, 當に「牴」につくるべし。「觸也」。[108]「冒」なる者は「冢ひて而して前む也」。[109] 吏は其の民を卹れまず。彊禦して民財を取れば, 則ち此れを生ず。「抵冒」亦た董仲舒傳に見ゆ。[110] 冒，古音茂（ボウ）。疊韵を以て訓と爲す。

（四）秋の聲也。此れ則ち虫部「螢蝥」[111] と同字。

（五）牟の聲。[112] 竹邑相張君碑に「蛑賊起こらず」と。[113] 凡そ漢人「侵牟」と言ふは皆な「蛑」の叚借。[114]

5a

[illegible]，蠶蟊 (一)，大蟺也 (二)，从蟲毗聲 (三)，[illegible]，蠶或从虫比聲 (四)，

蠶，蠶蟊，大蟺也，蟲に从ふ，毗の聲，蚍，蠶或いは虫に从ひ比の聲，

（校）「蠶蟊」，大徐本、祁刻本「蚍蜉」に作る。

（一）逗。雙聲。「蟊」は蚰部に見ゆ。[115]

（二）『爾雅』の文。[116]

（三）房脂の切，十五部。

（四）『方言』「蚍蜉」に作る。[117]

[illegible]，蟲也 (一)，从蟲門聲 (二)，

[illegible]，蟲也，蟲に从ふ，門の聲，

（一）蟲の一名。

107）十三篇下 2a。p.173 參照。

108）二篇上 9a 牛部「牴，觸也」，十二篇上 26a 手部「抵，擠也」。

109）七篇下 39a 部「冒」の説解。

110）「人民嚚頑，抵冒殊扞」顔注に「抵，觸也，冒，犯也」。

111）十三篇上 49b に「螢, 螢蝥, 毒蟲也」「蝥, 螢蝥也, 从虫秋聲」段注に「莫交切, 按古音當如木, 在三部」。

112）牟（二篇上 7b 牛部）段注に「莫浮切，三部」。

113）『隷釋』卷 7 竹邑侯相張壽碑。

114）『漢書』景帝紀「侵牟萬民」注に「李奇曰，牟，食苗根蟲也，侵牟食民，比之蛑賊也」，李廣利傳「不愛卒，侵牟之」注に「師古曰，侵牟言如牟賊之食苗也」。

115）十三篇下 4a。p.179 參照。

116）釋蟲に「蚍蜉，大蟺，小者蟺」。

117）卷 11。

（二）當に『篇』[118]、『韵』[119] に依りて二に从ふべし。[120] 武巾の切，十三部。按ずるに此れ蚊の一名耳（のみ）。當に仍りて蚊（ブン）に讀むべからず。當に『篇』、『韵』「良刃の切」に依るべし。

蠭，臭蟲，負蠜也 (一)，从蟲非聲 (二)，蠭，蠭或从虫 (三)，

蠭，臭蟲，負蠜也，蟲に从ふ，非の聲，蜚，蠭或いは虫に从ふ，

（一）按ずるに「臭蟲」下，奪字有り。當に「臭蟲也，一に曰く，負蠜也」と云ふべし。畫然として二説なり。虫部「蝝」下の三説を竝載する[121] が如き也。『春秋』莊二十九年「秋，蜚有り」，『左氏傳』曰く「災と爲す也」，『公羊傳』曰く「異を紀す也」[122]，『穀梁傳』曰く「一に有り一に亡きを有と曰ふ」[123] と。『漢』五行志「劉歆は以て負蠜と爲す也，性穀を食せず，穀を食するを災と爲す」と。[124] 按ずるに子駿[125] は蓋し左氏の説を演ぶる也。「劉向以爲く，蜚の色は青，青眚に近し。中國有る所に非ず。南越盛暑，男女川澤を同じうす。淫風生ずる所。蟲爲るは臭悪。是の時，嚴公 齊の淫女を取りて夫人と爲す。既に入りて兩叔に淫す。故に蜚至る」。按ずるに子政[126] は蓋し穀梁の説[127] を演ぶ。而して何休、范甯皆な之れに從ふ也。許，「臭蟲」を先に列し，而して「負蠜」之れに次ぐ。許意へらく，子政の説長ずる也と。負蠜は蠜と畫然として二物。釋蟲に曰く「皇螽は蠜也」と。毛傳同じ。[128] 許同じ。此れ一物也。釋蟲に曰く「草螽（今『爾雅』「蟲」に作るは譌り[129]）は負蠜也」と。毛傳は則ち「草蟲、常羊也」と云ふ。常羊は卽ち負蠜。鄭箋に云「艸蟲鳴けば則ち皐螽躍りて之れに從ふ」と。是こを以て之れを負蠜と謂ふ也。劉子駿及び許の負蠜は卽ち艸蟲也，卽ち常羊也。『左氏』の以て蜚を釋する所也。[130]

118）『大廣益會玉篇』蟲部第四百三「蠭，力刃切，螽也」。

119）『廣韻』去二十一震・遯（良刃切）小韻「蠭，螽也」。

120）十二篇上 14b 門部「鬥，登也，从門二，二，古文下字」段注に「會意，臣鉉等曰，下言自下而登上也，按从門二當作从門二，篆當作鬥，篇、韵蠭字可證，直刃切，十二部」。

121）十三篇上 46a「蝝，復陶也，劉歆說，蝝，蠕蠕子也，董仲舒說，蝝，蝗子也」。

122）何休注に「蜚者臭悪之蟲也，象夫人有臭悪之行」。

123）范甯「穀梁說曰，蜚者南方臭悪之氣所生也，象君臣淫泆有臭悪之行」。

124）五行志中之下・聽羞「嚴公二十九年，有蜚，劉歆以為負蠜也，性不食穀，食穀為災，介蟲之孽，劉向以為蜚色青，近青眚也，非中國所有，南越盛暑，男女同川澤，淫風所生，為蟲臭悪，是時嚴公取齊淫女為夫人，既入，淫於兩叔，故蜚至。」。「嚴」は後漢の明帝（劉莊）の諱を避けたもの。

125）劉歆の字。

126）劉向の字。

127）范甯注（注 123）參照。

128）召南・草蟲「趯趯阜螽」傳「草蟲，常羊也，……，阜螽，蠜也」箋「草蟲鳴阜螽躍而從之」。阮元本經傳箋は「皇」を「阜」に作る。

129）阮元本は「螽」に作る。

130）元年「有蜚，不為災，亦不書」注「蜚，負蠜也」。

臭蟲 南越に生じ而して中國に有りに至るは，子政の説則ち然り。亦た「蜮有り」[131]「鸜鵒來りて巢くう有り」[132] の如く皆な本と有る所に非ず。『公』『穀』の以て蜚を釋する所也。釋蟲に曰く「蜚は蠦蜱」，郭云く「臭蟲，負盤也」と。[133]　攷うるに，『本艸經』「蜚蠊」，注家云く「辛辣にして而して臭し，漢中の人は之れを食す，一名盧蜱，一名負盤」と。[134] 郭注亦た此れを謂ふ。而して許 虫部「蜱」下，但だ「盧蜱」と言ひ，「蜚」と言はざる也。[135] 許，盧蜱を以て臭蟲と一物と爲さざるに似たり。『本艸』の「蜚蠊」必ずしも淫气生ずる所に非ず。劉向以て經を説く所の者も又た未だ必ずしも蜚蠊ならざる也。故に盧蜱と云ふ所の者は蓋し『本艸』の「蜚蠊」。此こに云ふ「臭蟲」なる者は未だ必ずしも『本艸』の「蜚蠊」爲らざる也。盘[136] 鏨二字尤も當に牽混すべからず。

（二）房未の切，十五部。

（三）今『春秋』三經皆な此くの如く作る。古書多く叚りて飛字と爲す。[137]

5b

蠱，腹中蟲也 (一)，春秋傳曰，皿蟲爲蠱，晦淫之所生也 (二)，梟磔死之鬼亦爲蠱 (三)，从蟲，从皿 (四)，皿，物之用也 (五)，

蠱，腹 蟲に中る也，春秋の傳に曰く，皿蟲を蠱と爲す，晦淫の生ずる所也，梟磔死の鬼亦た蠱と爲す，蟲に从ひ，皿に从ふ，皿，物の用也，

（校）「梟磔」，大徐本、祁刻本「梟桀」に作る。

131）『春秋』莊公十八年經。『公羊傳』に「記異也」，『穀梁傳』に「一有一亡曰有」。阮元本は三傳いずれも「蜮」を「蜮」に作る。

132）『春秋』昭公二十五年經。『左傳』に「書所無也」。

133）郭注「蜱即負盤、臭蟲」阮元校勘記に「單疏本、雪牕本同，春秋隱元年左傳有蜚不為災，正義曰，釋蟲云，蜚，蠦蜱，舍人、李巡皆云，蜚蠦一名蜱，郭氏云，蜚即負盤、臭蟲，洪範五行傳云，蜚，負鏨，本草曰，蜚，厲蟲也，經傳皆云，有蜚則此蟲，直名蜚耳，不名蜚蠦，說爾雅者，言蜚蠦一名蜱，非也，然則郭讀爾雅蜚一名蠦蜱，不與舍人、李巡同，邢疏龔用春秋正義，而郭注仍作蜱，誤甚，今邵晉涵正義改作蜚，嚴元照云，山海經中山經有鳥如雉恒食蜚，注云，蜚，負盤也，音蜚，可與雅注相證」。

134）『重修政和證類本草』卷 21 蟲部中品･寅蠊「唐本注云，此蟲味辛辣而臭，漢中人食之，言下氣名曰石薑，一名盧蜱，音肥，一名負盤」。

135）十三篇上 48b「蜱，盧蜱也」段注に「按爾雅蜚、蠦蜱爲一物，許書蜚在蟲部，蜱在虫部，不言一物」。

136）許惟賢整理本『説文解字注』注に「「盘」是「盤」之形誤。「負盤」見上引『爾雅』郭注」。

137）『史記』周本紀「蜚鴻滿野」正義に「蜚音飛，古飛字也」，『漢書』宣帝紀「鸞鳳萬舉，蜚覽翱翔」成帝紀「有雉蜚集于庭」五行志中之下「書序又曰，……，有蜚雉登鼎耳而雊」司馬相如傳上・子虛賦「蜚襳垂髾」下・大人賦「蜚英聲」東方朔傳「蜚廉」王莽傳下「蝗從東方來，蜚蔽天」注に「蜚，古飛字」，また『文選』卷 7 子虛賦注に「蜚，古飛字」。

（一）「中」「蟲」皆な去聲に讀む。『廣韵』[138]、『集韵』[139] 皆な曰く，「蟲，直衆の切，物を蟲食する也，亦た**蚺**に作る」と。「腹中蟲」なる者は，腹內蟲食の毒に中るを謂ふ也。外自りして入る，故に「中」と曰ふ。內自りして**餘**す，故に「蟲」と曰ふ。此れ虫部「腹中の長蟲」[140]、「腹中の短蟲」[141] と讀異なる。『周禮』「庶氏，毒蠱を除くを掌る」，注に云く「毒蠱は，物を蟲して人を病害する者，賊律に曰く，敢へて人を蠱し及び敎令する者は棄市すと」。[142]『左氏』正義に曰く「毒藥を以て人を藥し，人を令て自ら知らざらしむ，今律 之れを蠱と謂ふ」と。[143] 玄應屢しば『説文』を引きて「蠱，腹 蟲に中る也，蟲毒を行ふを謂ふ也」と。[144] 下五字は蓋し黙注語。顧野王『輿地志』に曰く「主人食飲を行ふ中に人を殺す。人覺えざる也」と。[145] 字，蟲を飲食器中に箸くるに從ふ，會意。

（二）「晦淫」俗本「淫溺」に作る。[146] 誤れり。今宋本に依りて正す。「春秋の傳」なる者は，昭元年『左氏傳』の文。醫和 晉侯の疾を視て曰く「是れ女室に近づく疾と爲す」，句。「蠱の如し。鬼に非ず食に非ず，惑ひて以て志を喪ふ。天に六氣有り，淫すれば六疾を生ず。陰淫は寒疾，陽淫は熱疾，風淫は末疾，雨淫は腹疾，晦淫は惑疾，明淫は心疾。女は陽物にして晦の時。淫すれば則ち內熱、惑蠱の疾を生ず。文に於て皿蟲を蠱と爲す。穀の飛ぶも亦た蠱と爲す。周易に在りては，女 男を惑はし，風 山を落す，之れを蠱と謂ふ。皆な同物也」と。和「蠱の如し」と言ふ者は，蠱は鬼物飲食を以て人を害す。女色は鬼物飲食有るに非ざる也。而して能く人を惑はし害す。故に「蠱の如し」と曰ふ。人 女毒を受くれば，一に蠱毒に中るが如く然り。故に**數**辭は之れを「蠱容」と謂ひ，[147] 張平子の賦は之れを「妖蠱」[148] と謂ひ，之れを「蠱媚」[149] と謂ふ。皆な蠱の如しの説也。「文に於て皿蟲を蠱と爲す」と言ふ者は字を造る者，蟲 皿中に

138）去一送・仲（直衆切）小韻に「蟲，蟲食物，又音沖，或作**蚺**」。

139）去一送・仲（直衆切）小韻に「蟲**蚺**，蟲食物也，亦作**蚺**」。

140）十三篇上 42b「**蛸**」説解。

141）十三篇上 42b「蟯」説解。

142）秋官。阮元校勘記に「毒蠱蟲物而病害人者，錢鈔本、嘉靖本、毛本同，閩監本蟲作毒，誤，大字本作蟲物而能病害人者也，今本蓋脫二字」。

143）昭公元年傳「趙孟曰，何謂蠱，對曰，淫溺惑亂之所生也，於文皿蟲為蠱」，疏に「蠱非盡由淫也，以毒藥藥人，令人不自知者，今律謂之蠱毒」。阮元本は「知」下に「者」字，「蠱」下に「毒」字有り。

144）『一切經音義』巻 1 大方廣佛華嚴經第二十七巻「蠱毒」、巻 14 四分律第四十八巻「蠱道」注。巻 2 大般涅槃經第四巻「蠱道」、巻 3 摩訶般若波羅蜜經第十四巻「蠱道」注は「謂行毒蟲」に作る。

145）『文選』28 鮑照・苦熱行「吹蠱痛行暉」李善注に「顧野王輿地志曰，江南數郡有畜蠱者，主人行之以殺人，行食飲中，人不覺也」。

146）桂馥『義證』は「淫溺」に作る。

147）繫辭上に「冶容誨淫」。桂馥『義證』に「揚慎曰，易冶容誨淫，太平廣記引作蠱容誨淫」。

148）『文選』巻 2 西京賦「妖蠱艶夫」。

149）『文選』巻 4 南都賦「侍者蠱媚」。

在るを謂ふ。而して人を**飤**[150]はすは卽ち人を以て皿と爲し而して其の中を蝕む。「康[151]は之れを蠱と謂ふ」。[152] 米も亦た皿也。「女 男を惑はし, 風 山を落せば」, 男も亦た皿也, 山も亦た皿也。故に「皆な同物也」と云ふ。此れ皆な「蠱」の引申の義。

(三)「梟磔」, 各本「**梟**桀」に作る。『史記』封禪書『索隱』樂彥を引きて云く「左傳に皿蟲を蠱と爲すと。梟磔死の鬼も亦た蠱と爲す」と。[153]「梟」[154]は當に「**槑**」に作るべし。「首を**斷**ちて倒まに縣く」。[155]「磔は辜也」。[156] 人を殺して而して之れを申張する也。强死の鬼, 其の**魂**魄能く人に馮依し以て淫厲を爲す。是れ亦た人を以て皿と爲し而して之を害する也。此れ亦た引申の義。序卦傳に曰く「蠱なる者は事也」, 伏曼容注して「蠱は惑亂也, 萬事, 惑從りして起く, 故に蠱を以て事と爲す」と曰ひ,『大傳』「乃ち五史に命じて以て五帝の蠱事を書す」を引く。[157]

(四) 會意。公戶の切。亦た去聲。五部。『聲類』弋者の切。[158] 音冶。

(五)「物」上, 當に「蠱」字有るべし。皿は飲食を盛り蠱を行ふ所以の者也。此れ皿に从ふの意を説く。

文六　重四

(風部)

6b

𠬝, 八風也, 東方曰**𠬝**庶風, 東南曰清**𠬝**風, 南方曰景風, 西南曰涼風, 西方曰**閶闔**風, 西北曰不周風, 北方曰廣莫風, 東北曰融風 (一), 从虫凡聲 (二), 風動蟲生, 故蟲八日而匕 (三), 凡風之屬皆从風, 𠬝, 古文風,

---

150) 五篇下 10a 食部「**飤**, 糧也」段注に「按以食食人物, 其字本作食, 俗作**飤**, 或作飼, 經典無**飤**, 許云, **餇**, 食馬**穀**也, 不作**飤**馬, 此篆淺人所增, 故非其次, **釋**爲糧也, 又非, **宜**刪」。

151) 七篇上 46b 禾部「穅, 穀之皮也, 康, 穅或省作」段注に「云穀者, **晐**黍稷稻粱麥而言, 穀猶粟也, 今人謂已脫於米者爲穅」。

152)『爾雅』釋器。郭注「米皮」。

153)「秦德公既立, 卜居雍, ……磔狗邑四門, 以禦蠱**菑**」索隱。但し, 樂彥の引用ではなく, 今本索隱は「磔」下に「死」字が無い。

154) 六篇上 66a 木部「梟, 不孝鳥也, 故日至捕梟磔之」。

155) 九篇上 17b **槑**部「**槑**, 到**省**也, 賈侍中說, 此**斷省**到縣**槑**字」。

156) 五篇下 45a 桀部「磔」說解。

157)『周易集解』卷 5 に「伏曼容曰, 蠱, 惑亂也, 萬事從惑而起, 故以蠱為事也, 案尚書大傳云, 乃命五史, 以書五帝之蠱事」。

158)『一切經音義』卷 7 正法華經第二卷「蠱狐」注、卷 14 四分律第四十八卷「蠱道」注の『聲類』音は「弋者反」。卷 2 大般涅槃經第四卷「蠱道」注は「聲類, 弋堵反」(磧藏本「堵」を「者」に作る)」卷 3 摩訶般若波羅蜜經第十四卷「蠱道」注「聲類, 翼者反」。

風，八風也，東方を**明**庶風と曰ひ，東南を清**明**風と曰ひ，南方を景風と曰ひ，西南を涼風と曰ひ，西方を**閶闔**風と曰ひ，西北を不周風と曰ひ，北方を廣莫風と曰ひ，東北を融風と曰ふ，虫に从ふ，凡の聲，風動けば蟲生ず，故に蟲八日にして匕す，凡そ風の屬は皆な風に从ふ，**㐭**，古文の風，

（校）大徐本、祁刻本，「匕」を「化」に作り，「从（從）虫凡聲」，「化」下に在り。

（一）樂記「八風，律に從ひ而して姦せず」，鄭曰く「八風，律に從ひ節に應じて至る也」と。『左氏傳』に「夫れ舞は八音を節して八風を行らす所以」，服注して「八卦の風也，乾は音石，其の風不周，坎は音革，其の風廣莫，艮は音匏，其の風融，震は音竹，其の風明庶，巽は音木，其の風清明，離は音絲，其の風景，坤は音土，其の風涼，兌は音金，其の風**閶闔**，易通卦驗に曰く，立春は調風至り，春分は明庶風至り，立夏は清明風至り，夏至は景風至り，立秋は涼風至り，秋分は**閶闔**風至り，立冬は不周風至り，冬至は廣莫風至る」と。[159]

『白虎通』「調風」を「條風」に作り，「條なる者は生也」「明庶なる者は**衆**を迎ふる也」「清明なる者は芒也」「景なる者は大也，陽氣長く養はるるを言ふ也，涼は寒也，陰氣行る也，**閶闔**なる者は咸な收藏する也，不周なる者は交はらざる也，陰陽未だ合ひ化せざるを言ふ矣，廣莫なる者は大莫也，陽氣を開く也」と。[160] 按ずるに「調風」、「條風」、「融風」，一也。「八卦」、「八節」、「八方」，一也。『通卦驗』は調風に始め，許は融風に終ふる者は，許は『易』八卦の次に依りて艮に終ふる也。艮なる者は萬物の終を成して始を成す所以也。風の用は大なり矣。故に凡そ無形にして致す者は皆な風と曰ふ。詩序に曰く「風は風也，教也，風以て之れを動かし，教へて以て之れを化す」と。[161] 劉熙曰く「風は氾也」「放也」と。[162]

（二）凡，古音は扶音の切。風，古音は孚音の切。七部に在り。今音方戎の切。[163]

（三）『韵會』[164] に依れば此の十字「虫に从ふ，凡の聲」の下に在り。此れ虫に从ふの意を説く也。『大戴禮』[165]、『淮南書』[166] 皆な曰く「二九十八，八は風を主り，風は蟲を主る。故に蟲八日にして化す也」と。謂「風の大數は八に盡く」。故に蟲八日にして化す。故に風の字は虫に从ふ。

159）隱公五年傳。服虔注は孔疏引く所。阮元本疏は「八卦之風」下に「也」字無く，「易通卦驗」下「曰」を「云」に作る。阮元校勘記に「離音絲，宋本離作离，下同」。

160）八風。今本は，「生」を「正」に作り，「芒」上に「清」字有り，「景」下に「者」無く，「陽」上に「言」無く，「**閶闔**者，咸收藏也」は「昌盍風至，戒收藏也」に作り，「陰陽」上「言」字無く，「合化」下「矣」字無く，「大」下「莫」字無し。段玉裁の引用は『禮記』樂記「八風」疏引く『白虎通』に同じ。

161）周南・關雎の序。

162）『釋名』釋天。

163）古十七部諧聲表で凡聲は七部，今韵古分十七部表で方戎の切（東韻）は九部。

164）上平一東・風（方馮切）小韻。『韻會』は「匕」を「化」に作る。

165）易本命。「日」を「月」に作り，「化」上に「而」字無し。

166）**𨻰**形訓。「故蟲」を「蟲故」に，「日」を「月」に作り，「化」下「也」字無し。

7b

𩦎，北風謂之飆 (一)，从風京聲 (二)，

飆，北風は之れを飆と謂ふ，風に从ふ，京の聲，

（校）大徐本、祁刻本，「京」を「涼省」に作る。

（一）『爾雅』に「南風は之れを凱風と謂ひ，東風は之れを谷風と謂ひ，北風は之れを涼風と謂ひ，西風は之れを泰風と謂ふ」と。[167] 毛傳『詩』凱風[168]、谷風[169] に於いて皆な用て訓と爲す。桑柔の「大風」は則ち何風か言はず。而して箋は「西風」を以て之れを釋す。[170] 若邶詩「北風其れ涼たり」，本と「涼風」の字無し。故に毛但だ「寒涼之風」と曰ふ而已(のみ)[171]，『爾雅』を用ひざる也。陸氏爾雅音義に曰く「涼，本或いは飆に作る」と。[172] 許據る所の『爾雅』，或作本に同じ。

（二）各本，「涼の省の聲」に作る。俗人改むる所。「涼」[173]「輬」[174]「醠」[175] 皆な京の聲。今正す。呂張切。十部。

𩦏，小風也 (一)，从風术聲 (二)，

颰，小風也，風に从ふ，术の聲，

（一）「也」，『玉篇』「皃」に作る。[176]『廣韵』の「颰」[177] は卽ち此の字也。

（二）翾聿の切，十五部。

𩦐，扶搖風也 (一)，从風猋聲 (二)，𩦑，古文飆 (三)，

飆，扶搖の風也，風に从ふ，猋の聲，颮，古文の飆，

（校）大徐本、祁刻本「古文飆」を「飆或从包」に作る。

（一）司馬『莊子』に注して云く「上行の風は之れを扶搖と謂ふ」と。[178] 釋天に曰く「扶搖は

167）釋天。釋文に「涼，本或作古飆字，同，力張反」。
168）邶風。「凱風自南」傳に「南風謂之凱風」。
169）邶風。「習習谷風」傳に「東風謂之谷風」。
170）大雅。「大風有隧」箋に「西風謂之大風」。
171）邶風・北風「北風其涼」傳に「北風，寒涼之風」。
172）通志堂本は「飆」上に「古」字有り。注 72 參照。
173）十一篇上二 34b 水部「涼，薄也，从水京聲」段注「呂張切，十部」。
174）十四篇上 39a 車部「輬，臥車也，从車京聲」段注「呂張切，十部」。
175）十四篇下 42b 酉部「醠，襍味也，从酉京聲」段注「呂釀切，十部，按當呂張切」。
176）『大廣益會玉篇』風部第二百九十九に「颰，呼劣切，小風皃」。
177）入六術・𩦏（許聿切）小韻「颰，小風皃」。
178）逍遥遊「摶扶搖而上者九萬里」，釋文に「扶搖，徐音遥，風名也，司馬云，上行風謂之扶搖，爾雅云，扶搖謂之飈，郭璞云，暴風從上下也」。

之れを**猋**と謂ふ」，郭云く「暴風は下從り上る」。按ずるに『爾雅』、月令[179] は古字を用ふ。陸云く「字林 **飈**に作る」と。[180]『説文』を言はず。此等，一を擧げて以て二を包ぬる耳(のみ)。

（二）甫遙の切，古音は三部に在り。[181]

（三）各本「**飈**，或いは包に从ふ」に作る。今正す。班固 西都の賦「**飈飈**紛紛」李善[182]、李賢[183] 注皆な「**飈**，古**飈**字」を引く。

𩘰，回風也 (一)，从風**㚇**聲 (二)，

飄，回風也，風に从ふ，**㚇**の聲，

（一）「回」なる者は，般旋して起くるの風。『莊子』に所謂る「羊角」，司馬云「風曲り上行すること羊角の若き也」と。[184] 釋天に云く「迴風を飄と爲す」と。匪風の毛傳[185] 同じ。按ずるに何人斯の傳に曰く「飄風は暴起の風」と。[186] 文に依りて義を爲す。故に「回風」と云はず。

（二）撫招の切，二部。

8a

𩘱，風聲也 (一)，从風立聲 (二)，

颯，風聲也，風に从ふ，立の聲，

（校）「風聲」，孫刻大徐本「翔風」に作り，祁刻本「朔風」に作る。

（一）各本，「翔風也」に作る。今『文選』風の賦の注[187] に依りて正す。『廣韵』同じ。[188] 九歌に曰く「風颯颯として木蕭蕭たり」と。[189] 風の賦に曰く「風颯然として至る有り」と。「翔風」は字の意に非ざる也。

（二）穌合の切，七部。

𩘲，高風也 (一)，从風**翏**聲 (二)，

179）孟春「**猋**風暴雨總至」鄭注に「回風為**猋**」，釋文に「**猋**風，必遙反，徐芳遙反，本又作飄。」

180）『爾雅』釋天釋文に「**猋**，必遙反，字林作**飈**，音同」。「**飈**」を，通志堂本は「**飈**」に作り，北京図書館本は「**飆**」に作る。

181）**猋**聲は古十七部諧聲表では三部だが，甫遙切（宵韻）は今韵古分十七部表では二部。

182）『文選』巻 1。注に「**飈飈**紛紛，衆多之貌也，説文曰，**飈**，古**飈**字也，俾姚切」。

183）『後漢書』班固傳上。李賢注に「**飈飈**紛紛，**衆**多也，説文曰，**飈**，古**飈**字」。

184）逍遥遊「摶扶搖羊角而上者九萬里」釋文に「角，司馬云，風曲上行若羊角」。

185）檜風。「匪風飄兮」傳。

186）小雅。「彼何人斯，其爲飄風」傳。

187）『文選』巻 13「有風颯然而至」李善注に「説文曰，颯，風聲，楚辭曰風颯颯兮木蕭蕭」。

188）入二十七合・**㕛**（蘇合切）小韻「颯，風聲」。『説文』とは言わない。

189）山鬼。

飂，高風也，風に从ふ，**翏**の聲，

（一）『呂氏春秋』有始覽に曰く「西方を**飂**風と曰ふ」と。[190]

（二）力求の切，三部。

𩘰，疾風也 (一)，从風忽，忽亦聲 (二)，

飄，疾風也，風、忽に从ふ，忽亦た聲，

（校）大徐本、祁刻本，「風」下「忽」上に「从（從）」字有り。

（一）『廣雅』「**飄**」に作る。[191]『廣韵』曰く「**飂**, **飄**の俗爲り」と。[192] 然らば則ち「**飄**」に作る者，又た「**飂**」の省也。按ずるに古へ「**飄**」字有り，亦た「疾風」と訓ず。[193] 楚飢の切。楚辭及び吳都の賦に見ゆ。[194]

（二）呼骨の切，十五部。

𩘱，大風也，从風胃聲 (一)，

飓，大風也，風に从ふ，胃の聲，

（一）王忽の切，十五部，『玉篇』「于貴の切」。[195]

𩘲，大風也，从風曰聲 (一)，

颰，大風也，風に从ふ，曰の聲，

（校）大徐本、祁刻本，「曰」を「日」に作る。

（一）「曰」，各本日月の「日」に作る。聲に非ざる也。[196] 今篆體と併せて正す。于筆の切。十五部。

𩘳，風所飛揚也 (一)，从風昜聲 (二)，

颺，風の飛揚する所也，風に从ふ，昜の聲，

190）高誘注「一曰**閶闔**風」。

191）卷 4 下釋詁に「**飂**、**飄**、**飄**、**飄**、**飄**、…、**飄**…，風也」，博雅音に「**飄**，忽」「**飄**，楚飢」。

192）入八物・**飄**（許勿切）小韻「**飄**，疾風」下に「**飂**，俗」。

193）『文選』呉都賦の劉逵注（下注參照），また『後漢書』馬融傳・廣成頌「靡**飄**風」李賢注に「**飄**, 疾風也, 音楚疑也」。

194）『文選』卷 5 呉都賦「翼**飄**風之**飄飄**」劉逵注に「**飄**，疾風，……，離騷曰，溢**飄**風兮上征」。今本『楚辭』離騷は「溘埃風余上征」に作る。

195）『大廣益會玉篇』風部第二百九十九に「**飓**，于貴切，大風也」。

196）古十七部諧聲表では曰聲は十五部，日聲は十二部。しかし，于筆切（質韻）は今韵古分十七部表では十二部。

（一）「揚」なる者は「飛舉する也」。[197]

（二）與章の切。十部。

𩔖，**颲颲**（一），風雨**暴**疾也，从風利聲，讀若**槑**（二），

颲，**颲颲**（リツレツ），風雨**暴**疾也，風に从ふ，利の聲，讀みて**槑**（リツ）の若くす，

（校）大徐本、祁刻本，「**颲颲**」二字無し。

（一）二字各本無し。今補ふ。**疊**韵字也。[198] 逗。

（二）力質の切。十三部。[199]

𩔖，**颲颲**也（一），从風**列**聲，讀若烈（二），

颲，**颲颲**也，風に从ふ，**列**の聲，讀みて烈の若くす，

（校）大徐本、祁刻本「**颲颲**」を「烈風」に，「若」下「烈」を「**列**」に作る。

（一）各本「烈風也」に作る。今正す。『詩』「二の日は栗烈たり」[200]，説文**夂**部「**凓**冽」に作る。今本「冽」を「**瀨**」に譌る。[201] 陸氏音義「**夂**部」と**偁**せず而して「説文，**颲颲**に作る」と曰ふ。蓋し**疊**韵にして音同じきに由りて誤る也。然れば以て古本の「**颲颲**」緜聯するを證す可し矣。『廣韵』五質「**颲**」下に曰く「**颲颲**，暴風」[202]，十七薛「**颲**」下に曰く「風雨暴至」[203] と。亦た證と爲す可し。

（二）良薛の切。十五部。按ずるに凡そ烈風は當に此の字に作るべし。其の譌る也，「別風」と爲す。[204]

文十三　　重二

197）十二篇上 39a 手部「揚」説解。

198）利聲も**列**聲も古十七部諧聲表では十五部。

199）力質切（質韻）は今韵古分十七部表では十二部なので，なぜ十三部なのか不明。

200）豳風・七月。傳「栗烈，寒氣也」，釋文に「栗烈，並如字，栗烈，寒氣也，説文作**颲颲**」。

201）二徐本**夂**部に「**凓**，寒也」「**瀨**，寒也」。段注本（十一篇下 9a）は「**凓**」の説解を「**凓**冽，寒皃，詩曰，二之日**凓**冽」に，「**瀨**」篆を「冽」篆に，「冽」説解を「**凓**冽也」に改める。

202）栗（力質切）小韻。澤存堂本「**颲颲**」を「**颲颲**」に作る。

203）列（良薛切）小韻。

204）『段注攷正』は，『文心雕龍』練字に「尚書大傳有**別**風淮雨，帝王世紀云列風淫雨」とあることを指摘する。

使用テキスト

『説文解字注』

　嘉慶二十年經韵樓本影印（上海古籍出版社，1981年）

必要に應じて，下の版本を參照

　嘉慶二十年經韵樓本影印（藝文印書館，1981年）

　皇清經解本

　同治六年保息局補刊本

『十三經注疏』

　阮元本影印（藝文印書館，1989年）

『經典釋文』

　通志堂本

必要に應じて北京図書館藏宋刻宋元遞修本を參照。

本稿はJSPS科研費JP18K00349の助成を受けたものである。